

なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.08 Mar 2010

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

なぎさシリーズ。

今回の旅は、九州の西岸、長崎県の西海市大島町。昔炭坑の町として栄え、現在は造船や漁業が盛んな地。作家の吉村喜彦さんが、大島の藻場復活に取り組む漁師を訪ねました。

なぎさシリーズ No.6

「四季藻場が夢ですけん」

吉村喜彦

◆ 九州、大島への旅 ◆

長崎空港から大村湾沿いをぐるりと西回りに車で走ると、やがてヨーロッパ風の奇妙な建物の並ぶハウステンボスが見えてくる。西彼杵（にしそのぎ）半島に渡り、くねくねした狭い坂道の続く畑のなかを突っ切るように走る。平成11年11月11日11時11分11秒に開通した大島大橋を越えると、ようやく目的地の大島に到着。空港を出てから、約1時間30分である。

低気圧が来ているため、3月中旬の西九州に雪が舞っていた。山あいの風景は真っ白。積雪までである。なのに畑には菜の花が



咲き、桜のつぼみもふくらんでいる。

東京でも極端に寒かったり異常に暑かったり、ジェットコースターのように気温が上下している。

体調のおかしい人も多い。気候が変なのは身体が一番よくわかっているのだ。

◆ 西海の漁師との出会い ◆

西海大崎漁協に、漁師・山下好則さんを訪ねた。

山下さんによると、かつて大島はアワビの宝庫だったそうだ。しかし藻場が減少し、アワビの生産量が激減したのだという。

	都道府県:	長崎県
	地域協議会:	長崎県地域環境・生態系保全活動支援協議会
	活動組織名:	大島地区藻場を守る会
	協定先:	西海市
	構成員数:	127名
	対象資源:	藻場
活動内容:	母藻の設置、食害生物の除去(ウニ類)、岩盤清掃、海藻の種苗投入、海藻の種苗生産	

そこで大島地区の漁師が中心になって、15年ほど前から、豊かな藻場を再生させようとさまざまな知恵を使っているとうかがった。

中心メンバーは漁協の青壮年部、そして潜水漁業を営む黒潮会の会員だけれど、2006年度からは、漁協の女性部や地元小学校、中学校、高校の生徒たちも参加しているそうだ。

09年度には、地元商工会青年部もメンバーに加わり、大島に暮らす人々が一体となって、自分たちの海を守るべく立ち上がっている——来る前にそれらのことはとりあえず資料で読んでいた。

しかし、資料はあくまで資料である。

なんだか袴（かみしも）を着ているのである。そこからはどうしてもリアルなものが見えてこない。

やはり漁師の生の声を聞き、そのニュアンスを感じたい。

そう思いながら、山下さんへのインタビューをはじめた。



山下さん（右）と筆者

◆ 海の変化・再生への模索 ◆

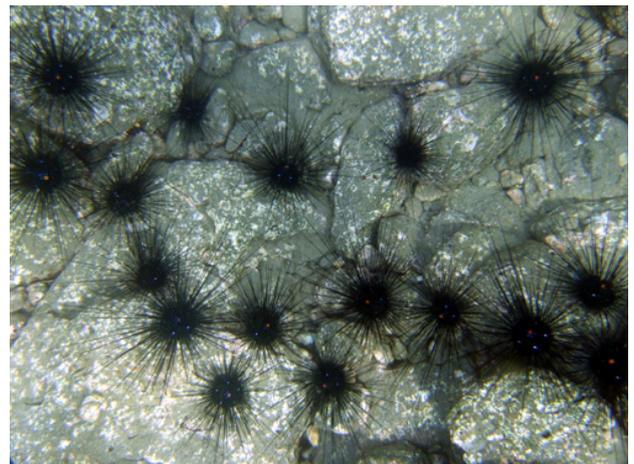
「1989年くらいから海藻、とくに多年生のクロメが減りはじめたんです。当時ア

ワビの稚貝の中間育成をやっていたんで、その餌として天然クロメをとっていたんですが、それが減って人工飼料を使うようになっていった。とうとう93年にはきれいにクロメがなくなってしまったとです。それからずっと天然クロメは全くない状態。これでは自分たちの暮らしがヤバかと思って始めました」

山下さんが語り出してくれた。

「最初はアワビを採りすぎないように、計画的な漁業をやろうとしたとですが、アワビの漁獲量はどんどん減っていきました。

なぜこれほど減るのか調べると、ガンガゼなどのウニや巻き貝にクロメが食べられていることがわかってきた。



海底を覆うガンガゼ

もともと「四季藻場」というか、年がら年中、藻はあったわけなんです。

ちぎれたクロメが岩場にはまればアワビの餌になっていた。ところが3月から7月くらいまでしか藻のない「春藻場」の状態になってしまった。

だから四季を通じてアワビの餌を作ろうと思ったとです。魚の産卵場や隠れ家にもなるし自分たちの食糧にもなる」

まずガンガゼや巻き貝を駆除し、99年

からは試験的にクロメの母藻づくりを始めた。

「産卵時期（10～11月）に海藻がないもんだから、そいばどがんかしようと、アワビの卵を付着させる器づくりとして母藻作りを考えた。アワビの卵は海の中を浮遊しとるわけですから、海藻があれば卵は付着できる。海藻がなければ、アワビの卵は波に揺られて陸に打ち上げられ死んでしまう確率がとても高いわけです」

当初、山下さんたちはまったくの手探り状態で藻場を生き返らせようとしたのだ。しかし、磯焼け状態は相変わらず続いた一。

◆ 試行錯誤の繰返し ◆

ウニ・フェンスもためしてみた。

「漁網をもみじ状に折り畳んで、それをチェーンに取り付け、バリケードみたいにして、そのフェンスの内側に海藻の種をまいた。ウニは硬いものは上れるけど、海中で揺れる網は足場が不安定で嫌うそうです」

それは成功しました？

「最初の年は成功したとです……」

海藻は繁茂した。が、それは一時的なもの。その後、フェンス内の海藻は消失してしまった。

「アイゴやブダイにきれいに食べられた。ウニが食べんでも、藻食性の魚がたくさん食べるとですよ。ウニ・フェンスは北海道で開発されたもので、ウニだけの被害なら、それですむ。ばってん、うちの海には藻食性の魚がおる……。しかも今まで冬場は動かんかったやつが積極的に動いて藻を食べる。結局フェンスの上も蓋して、魚を防ぐ手だてをせんと海藻は生えんと」

ウニと魚のダブル被害である。

大島周辺の海の最低水温は約14度。かつてはもっと低かった。14度になるとアイゴは活発に動き回るのだそうだ。

「昔は、冬、潜ると手がかじかんで指の引きちぎれるほど痛かというか、つんた（冷た）かった。ばってん、この頃はそういうことはなかです。サンゴもこの5～6年でどんどん増えてる。前から深い所にはあった。でも、今は水深1メートルまで上がってきてるとです」

考え方を方向転換せざるを得なくなった。

◆ 更なる挑戦 ◆

02年～03年にかけて、魚から守るために魚フェンスを作り、海藻プレートというのを使ってみた。



海藻プレート

「海藻プレート1枚ずつが小さい藻場ですたい。天然の海の中に生えとる藻の代わりに、自分たちでつくった海藻のプレートに移設する。岩礁に潜ってドリルで穴開けてボルトで固定するとです」

ところが魚フェンスは時化には弱く、四季を通じて海藻を育てることは難しかった。04年～07年には藻場増殖礁を設置した。

2メートル立方ほどの大きさで、今度は時化にも強い頑丈なものだった。

「とにかく藻の親を作ろうと、もともとクロメがあった場所に設置した。付いた種が海中に漂っていく『藻の基地』みたいなものなんですたい」

増殖礁内では順調にクロメが成長。遊走子も放出され、礁の外で再生産された。が、またもや食害でクロメは消失してしまった……。



藻場（クロメ）増殖礁

◆ 「何もせんなら、先行きなくなるけんね」 ◆

「どうもクロメだけだと食べやすいみたいだと。なら、このクロメを隠してみるのはいかがでしょうかと考えた。アイゴはノコギリモクなどのホンダワラ類は硬くて食べづらいんです。じゃあ、そいで隠そうと、『藻のカーテン』ですたい」

クロメよりも背の高いホンダワラ類とともに、07年から混成藻場を作りはじめたのである。

現状はどうですか？

「うーん。今のところはすべて食べられとる状態ですが、考え方としてはこの方向が

いいと思う。……とにかく魚が食べる藻の量が半端じゃなかとです。藻を作っても作っても食べられる。餌ばやりよる感じです。藻が伸びる前に食べられてる……。昔からアイゴはおった。でも許容量は超えとらんやった。海藻の量が今よりはるかにあったですから」

海藻がなくなれば、そこに付く小さな甲殻類も一緒にいなくなる。アイゴは雑食性なのでそれらも食べていたが、海藻が少なくなれば甲殻類がない分、より海藻を食べってしまう——。悪循環である。

「藻があれば他の魚がつく。魚がつけばタコやエビなどもくる。今はバランスが崩れてる。何とか少しでもバランスを元に戻せんかと思うとです。

南方系のホンダワラも増えてる。これだって餌になるだろう。南の海藻が上がってきてるなら、それも増やそうかと。何も無いよりはましじゃないかと。

温暖化は止められん。ぼってん、いつまで漁ができるか——？



今、おいは48歳ぼってん、あと20年は漁ばしたか。ならば邪魔なものは撤去するかってことになるわけです。もっと水温が高くなれば、今の漁をたぶん他の漁に変えんばならん。そうなる前に、今の仲間で

一緒に考えて、共にできる行動はやっておきたいと思うとですよ。

地球温暖化に対抗して勝とうとは思わん。ばってん、抵抗しとかんば、根暗になってしまうですたい。未来がなかですたい。税金からのお金使わせてもろうて、藻場再生ばしよるんですから、出してもろうた分のお返しはせんば、ちゅうか。そいば考えれば、自然ば残すちゅうのも恩返しになるやろうし。

『四季藻場』は夢ですけん。ばってん夢を諦めてしまえば何も残らんことになってしまう。藻場を守る会も作らんでよかし、仕事ば変わってもよかってことになってしまう。何もせんなら、先行きなくなるけんね」

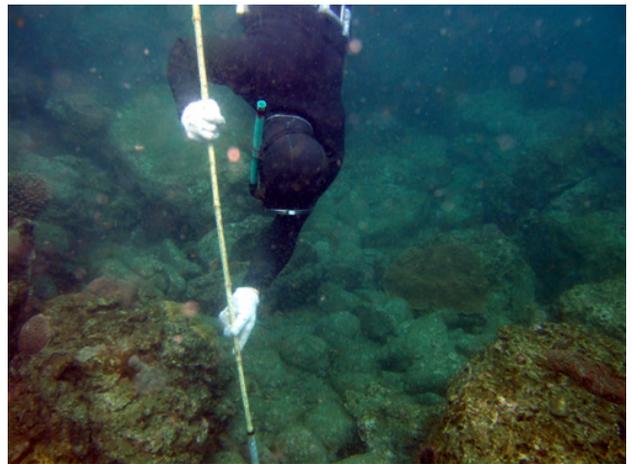
◆ 漁業関係者以外にわかりやすく伝えることの大切さ ◆

翌日は打って変わって快晴だった。気温も上昇して春らしくなった。

波はまったくない。黒潮会と青壮年部の方々の船に同乗させていただき、ガンガゼ駆除活動を見させてもらった。



参加人員9名。黒のウエットスーツに身をかためた男たちが海に潜ってガンガゼをつぶしていく。途中、藻場増殖礁や海藻プレートも見せていただいた。



手作りの道具でガンガゼ潰し

しかし、何より驚いたのはサンゴだ。

まるで沖縄の海のようにミドリイシがある。ほとんど亜熱帯の海である。山下さんによると、ソラスズメダイも多いそうだ。

陸で進行しているよりも、海の方がはるかに猛スピードで異変が進んでいる。



増え続けるサンゴ

海は地球の無意識だ。

人のこころの中で無意識が大きな部分を占めるように、地球のこころの中で海が占める割合は大きい。

意識の上ではまだ地球は大丈夫だと思っているが、それはあくまで表面的なもの（陸的なもの）なのだ。

ここまで大島の海がひどいことになって

いるとは、実際に接するまでわからなかった。

ひりひりするほどの危機的状況だ。

海は寡黙だ。言葉で伝えてはくれない。無意識が意識化（言語化）されるには時間がかかるのだ。

この状況をちゃんと日常的にメディアで伝えなければ、（ぼくを含めて）誰もその危機に気づかずにスルーしてしまう。何となく「地球温暖化なんですよええ」なんて世間話のようにして、明日はそんなことを忘れ去ってしまう。

ある一時（いつとき）だけ、「大変だ。大変だ」とメディアが感情的に騒ぎ立てるのではなく、日常的にこうした事実を知らせる努力をしなければいけない。

アホなお笑い番組やバラエティー番組をやっているヒマがあるなら、確実に破壊され続けている海の情報をメディアは発信すべきだろう。

いま、漁業で大切なことは、漁師が感じている「海の危機」を、漁業に携わる人以外にしっかりと身体で感じてもらうことではないか。「わかる人にはわかってもらえる」的な、いわばインナー向け（といっても漁師は置いてきぼり）の、漢字や数字、専門用語の多いわかりにくい情報では、単なる自己満足やエクスキューズで終わってしまう。

「吉村さん。今度こちらにいらっしゃったなら、ぜひ、おいどんたちのほんとの仕事（潜りや定置網や一本釣り）を取材してください」

何人もの漁師が同じ言葉を口にした——。水俣病をはじめ、人間の暮らしの矛盾が

すべて海に流れ込み、結局、最初にそのツケを払わされるのはいつも漁師だ。

人の命に限りがあるのと同じように、すべてこの世のものには限りがある。

そのことを一番わかっているのは、危機に瀕した漁師たちだ。



～ 著者プロフィール ～

吉村喜彦（よしむら のぶひこ）氏

作家。1954年大阪生まれ。

京都大学教育学部卒。

サントリー宣伝部勤務を経て作家に。

著書に「オキナワ海人日和」（カラカラ）、
「ピアボーイ」（新潮社）、
「漁師になろうよ」、「リキュール&スピリッツ通の本」（いずれも小学館）、
「食べる、飲む、聞く 沖縄美味の島」（光文社新書）、
「こぼん」（新潮社）など。



～編集後記～

平成21年度環境・生態系保全活動支援推進事業は、ひとまず終了です。JF全漁連事務局より心を込めて、今年度最終号をお届けします。ご尽力いただきました関係者の皆様方、応援していただいた皆様方、誠にありがとうございました。

環境・生態系保全活動支援推進事業（水産庁補助事業）

JF全漁連 漁政部 環境・生態系チーム

Tel 03-3294-9617 E-Mail gyosai-3@zangyorenj-net.ne.jp

